

チャールズ1世処刑の全て

オリヴァー・クロムウエルがユダヤ人による革命の企てに加担していたことを断固、実証する証拠はノース・ブリッティッシュ出版社から発行されていた週刊の評論誌『プレーン・イングリッシュ(Plain English)』の編集長アルフレッド・ダグラス卿によって入手された。(『プレーン・イングリッシュ(Plain English)』) 1921年9月3日号に掲載された記事で、同卿は友人でアムステルダムに住むL・D・ヴァン・ヴァーカルトが、ミュールハイムのシナゴグの記録のうち散失していた一冊を所有するようになった経緯について述べた。これはナポレオン戦争時に失われたもので、シナゴグの指導者に宛てられたり、指導者層によって記されたりした書簡の記録だった。(オリヴァー・クロムウエルがユダヤ人による革命の企てに加担していた証拠になるその書簡) それはすべてドイツ語で記され、1647年6月17日の日付のある一通には以下のように書かれていた—
O.C. (オリヴァー・クロムウエル) よりエベネザル・プラット宛て。

「経済支援の見返りに、ユダヤ人の英国への入国を提唱しよう。しかしながらこれは、チャールズが生きる限り、実行され得ない。が、裁判にかけない限り、チャールズの処刑は不可能であり、現在のところ裁判にかける適切な根拠も存在しない。それゆえ暗殺があることをチャールズに諫言するがよかろう。とはいえ、当方には暗殺者の手配に関わるつもりは一切無い。チャールズの逃亡を手伝うだけだ。」

これに対する返答として、記録によれば、E・プラットは1647年7月12日にクロムウエル宛てに以下のような手紙を記した—

「チャールズが除去され、ユダヤ人の入国が認められ次第、経済支援を行う。暗殺は危険すぎる。チャールズに逃亡の機会を与えるだけでよい。その後身柄を拘束すれば、裁判にかけられることも、処刑も可能となる。支援は惜しまないが、裁判が始まらないうちから、金額についての議論をしても意味は無い。」

同じ年の11月12日、チャールズは逃亡の機会を得たが、無論、再監禁された。この時代に関する研究の権威、ホリスもドロウも、この逃亡をクロムウエルの策略と見なす記録を残している。チャールズが再監禁されると、事態はたちまち進展した。クロムウエルは国王に忠誠を尽くすと思われる議員の大部分を英国議会から追放した。このような強硬措置がとられたにもかかわらず、1648年12月5日に夜を徹して下院議会議が続けられると、大多数は「国王によって提出された譲歩案は和解のために納得できる」と合意した。

和解の実現は、E・プラットを介して国際金融男爵(注: マナセ・ベン・イズラエルのこと) から約束された血塗れの金(殺人謝礼金)をクロムウエルが受け取れなくなることを意味した。そこで彼はもう一度手を打ってプライド大佐に命じ、国王との和解を支持した議員を議会から追放させた。これが歴史の教科書に現れる「プライドの追放」である。

追放の結果、50名の議員が残り、「臀部議会」として記録される議会が構成され、絶対権力が奪取された。1649年1月9日、英国王を裁く目的で、クロムウエルの軍隊出身の「水平派」がその3分の2を占める「高等法院」が宣言されたが、このメンバーにはチャールズ1世に対して犯罪告発状を草案する英国人法律家を見いだせなかった。そこでカーヴァーハルは英国におけるマナセ・ベン・イズラエルの代理人でユダヤ人のアイザック・ドリスラウスに命じて国王チャールズ1世を裁くための告発状を書かせた。チャールズは英国国民では無く、ユダヤ人である国際金融男爵によって差し向けられた罪状に対して有罪を宣言され、1649年1月30日にホワイトホール(ロンドン)のバンケッティング・ハウスの前で公開処刑された。エドワード1世によって英国を追放されたユダヤ人金貸し業者にしてみれば—サタンのシナゴグの高僧から指示を受けつつ—これで復讐が果たせたのだった。そしてオリヴァー・クロムウエルはかつてユダがそうしたように、血塗れの金を受け取った。(『闇の世界史』p86~p89からの引文。なお引文冒頭部で下線が入った()内の文は当方で補ったものです。)